



清涼夜



奥村綾子

「茶柱が立つのってね、お茶の妖精がつかずいて転んだ時にできるんだって。悪運を吸い取ってくれるから、幸運がくるんだってよ」

「じゃあ、千利休が最期切腹させられたのは？」

「そうねえ、さすがの妖精もそこまでは面倒見きれなかったんじゃない？」

そんな馬鹿な。

畳の上で冗談好きな川ちゃんが茶せんを優雅に回し、含み笑いをして私の前にそっと茶碗を差し出した。私は厳かに一礼し、泥緑を苦々しく受け取ると静かに飲み、そしてこれまた静かに「にがっ」と言った。

最近はずかしい事ばかりだ。やってもやっても上がらない成績、うざったい親、遠くから見るしかない先輩のこと。

「千利休も最初は苦かったのかな」

「そうじゃない？誰だって最初はうまくいかないと思うけど」

それを聞いて、なんだか安心した。

そうだよ！どんな偉い人だって最初から出来る人なんていないんだ！

そう心の中で確信すると、思わずガッツポーズしてしまった。それを見た川ちゃんがケタケタ笑いながら「変なのー」とテンカラットの目を輝かせた。気持ちが上がった私は、さっきの話の続きが急に聞きたくなって、「ね、さっきの妖精の話さ、続き聞かせてよ」と川ちゃんにしなだれかかった。

「もー、先輩が来たら怒られるんだから。茶道室でイチャイチャしてるって」

そう言いながら川ちゃんは心なしか嬉しそうだった。

水差しの蓋を閉めて座り直すと、エヘンとわざとらしく咳をした。

障子の外から、サッカー部のホイッスルとはじけた水のような掛け声が聞こえる。

「見に行かなくていいの？」

「いいの。それより話の続き」

だって、私なんて沢山いるうちの一人に過ぎないんだから。それでも口を広げた風船を心で持って、外の音を拾う準備はした。

「お茶の妖精はね、いつもは葉っぱの上で寝てるの。そこにいきなりお湯をかけられて『アチチッ！』って目を覚ますのよ。それはもうびっくりしちゃって、茶葉を蹴散らかして大騒ぎ！散々大騒ぎした後徐々に気持ちが落ち着いてきて、底に敷かれた茶葉の上でまた寝ちゃうの。でもね、茶柱が立つのは容易じゃないわ。だって妖精だって年がら年中転ぶわけじゃないからね。だから、茶柱が立つのはラッキーなのよ」

外から女子達の黄色い声がわっと響いた。

「でね、二本立ったらもっとラッキー！妖精がその茶碗に二人もいるってことだから。まあ、滅多にないんだけどね」

「それってさ、水筒のお茶にはいないの？」

「え？」

物語に酔いしれていた川ちゃんが、急に現実に戻ってきた。悪い事言っちゃったかな。すぐに反省したけど、川ちゃんは外に目をやるとああ、と言ってにやりとした。

「ふふ、水筒にもきつといるよ」

「ほんと？」

「うん。妖精も要所要所に合わせて住処変えてるって。ほら、今言ってる。『お茶碗だけに縛られたくない』って」

川ちゃんはいたずら顔で、お茶碗を耳まで持って聴かせてくれた。

優しい親友だ。

「お茶は疲労回復にいいぞお」

川ちゃんが顔を近づけて、笑顔で覗き込んできた。

でもね……。

家に着くと居間から「遅かったのね、部活もやってないのに」という嫌みな母親の声が聞こえた。

(ほんとにイライラする)

どうしてだろう、中学2年になってから急に、将来のことも母親の言動の何もかもがうざったくなった。小学生の頃は食器のお片付けも、学校での報告も率先してやってたのに、今は全てが面倒臭い。母親に言われると猶更嫌になる。私が学校で何してようがほっといてよ。そう思うけど、口を聞くのも嫌なので無視して二階に上がった。

「返事ぐらいしなさいよ」という悲鳴めいた声が背中を追いかけてきたけど、後ろ手で追いやって部屋に閉じこもった。

すっかり暗くなった夜の中に茶畑が揺れていた。ペタリと座り窓の縁に頬杖すると、お行儀よく並んだ永遠と続く茶畑の絨毯を眺めていたら、風船の水がいつしか涙に変わって、今にもあふれ出そうになっている。

—私、泣くかもしれない—

来年は受験で、それに備えて塾に行っている子がいる。秋の県大会の為に一生懸命部活をやっている先輩も。でも私は……。

ふと、先輩の笑顔が思い浮かんだ。

ボールをスカした時の苦笑いの顔。女子の声援に照れ笑いする笑顔。そして、仲間と喜び合う最高の笑顔。

その時水風船が、頑張っているみんなの足に踏まれてパチンと弾けた。

すぐさま顔を覆ったけど時既に遅し。あふれ出る涙涙涙が指の隙間からこぼれ落ちる。

涙涙涙。

葉が小刻みに揺れて、こすれ合う葉の音々が心をも揺さぶった。

月も夜も風も茶畑もただただ傍観しているだけの、無機質な夜。

今日は素敵な夜になるはずだったんだ。だって、幸運をもたらしてくれる、ちょっとドジなお茶の妖精のこと聞いたから。

暖かな風が体を包んだ。

顔を上げると、一枚の葉が手の甲にへばりついていていた。

いつの間に？不思議に思いながらもつまんで外に飛ばそうとした時—。

「イテテ」

ん？何か聞こえた？

振り返ってみた。

誰もいるわけないか。

気を取り直して外に放り投げようとする、さっきの声が一段と大きな声で聞こえてきた。

「わー、待って待って！」

え？

えええええ??

「もう、ひどいよ。出てきたと思ったらこんな仕打ち」

お茶っ葉がしゃべってる……。いや、お茶っ葉を羽にした親指大の男の子。

声が出ない。

時間が止まる。

思考が止まる。

涙も唾も息も血の流れでさえも。

「それに僕の悪口思ってたでしょう？あーあ、せっかく元気づけてあげようと思ったのになあ」

そんな、まさか。嘘？

パクパクパク

「え？なに？」

パクパク

「もうやだなあ。川ちゃんから聞いてるくせに」

男の子はそう言うと、頭にかぶった小さな湯呑みを手で回した。

「か、川ちゃんのこと知ってるの？」

「当たり前だちゃ。川ちゃんは最初から、おいらの事歓迎してくれたよ」

いやいや、こんな事あるわけない。夢？幻想？

「とにかくさ、これ飲んで落ち着いてよ」

頭の湯呑みを重たそうに私の前に運ぶと、お尻から勢いよく緑の液体を出した。

「これ飲むの？なんかやだなあ、お尻から出たやつなんて」

「何言ってるのさ。今年採れたて一番茶だよ。気遣って黄色じゃなくて緑にしといたんだから」

やっぱり夢だ。そうだ、これは夢なんだ。それならよーし。そう思って勇気を出して口を開け、少しだけ入れてみる。

すると、またまたびっくりした。

なにこれ？すっごく美味しい！最初は苦味だけど、ジワジワ利いてくる甘味。口いっぱい広がる香り豊かな風味！心の奥底まで染み渡ってくる日向ぼっこした時の暖かな気持ち。

「おーいしーい！」

心から声が漏れた。

「そうでしょ？僕の唯一の自慢なんだ」

男の子は鼻の下をこすって、どうだと言わんばかりに胸を張った。

「こんなおいしいの、飲んだことない」

「なんたって今年一番の一番茶だからね」男の子は湯呑みの淵に腰掛け、足を組んだ。

もしかしたら本当かもしれない。じわじわとお茶が体に浸透していくうちに、私自身も目の前の出来事に浸食されてきた。

「どう？少しは落ち着いてきたかい？」

こくりと頷く。

「じゃあ改めまして。おいらはお察しの通りお茶の妖精、イチノ・リキュウってんだ。イチって呼んでよ」

「イチノ・リキュウさん？」

「そうだよ」

「ふーん」

「なに？なんか言いたそうだね」

「だってさ、イチノ・リキュウさんがいるってことは、ジュウノ・リキュウさんとかヒャクノ・リキュウさんとかいるわけ？」

イチはやれやれといった調子で、湯呑みからひよいと飛び降りた。

「まったく、類は友を呼ぶって本当だね。川ちゃんからも同じ質問されたよ」

「だって、そりゃ思うよ。イチノ・リキュウって言われちゃ。だってあの千利休のパクリ……」

「こら！千利休先生を呼び捨てしちゃだめだい」

窓の縁で仁王立ちしたイチは、キリリと眉毛を上げた。

「ごめんなさい。昔の人だどつい呼び捨てしちゃう」

しおらしく頭を下げてみた。その姿に満足したのか、イチは縁の端を行ったり来たりしながら話し始めた。

「そうさ、ジユウノさんもヒヤクノさんもおいらの仲間さ。まあ、おいらより歳は食ってるけどね。おいらよりゼーんぜん渋いんだから」

その時、茶畑からまた暖かい風が舞い込んできた。

月に照らされた茶畑の波をサーフボードに乗ってやってくる二人組がいる。よくよく見ると、茶葉をサーフボードにしているようだ。

イチが慌てて私の後ろに隠れた。

「イチ、それは僕らの褒め言葉かな」

「やあ美貴ちゃんこんばんは。イチが失礼な事してないかい？」

しどろもどろになった私にイチが後ろからこっそり教えてくれた。

「ジユウノさんとヒヤクノさんだよ。おいらの先輩なんだ」

「え、あの人たちが？すごいギャル男。全然お茶っぽくない」

「シーッ！」

イチが焦ったように指を口に当てた。

二人は窓辺の縁までヒーローばりに飛び降りると、茶葉ボードを片手で抱えイチの手を掴んだ。

「また長いおしゃべりしてるな。全く、目を離すといつもこうなんだから」

「ごめんよお。師匠には内緒にしといて！」

「さあ行こう。もう時間がない」

ジユウノさんはそう促すと、茶畑のほうへくるりと体の向きを変えた。

「え！まだ話の続きが……」

慌ててそう言うと、葉を羽ばたかせ始めたイチが、顔だけ向けてにっこりと笑った。

「お茶の魔法をかけておいたよ」

「お茶の魔法？」

「そうさ。大ラッキーの魔法さ！」

縦横無尽に空中回転したイチ達が、羽から星を舞い上げて夢の向こう側に消えた。

茶畑は海からいつもの絨毯になっていた。

清涼な夜。

—今だったら私も飛べるのかな—

台所に行って半信半疑のままお茶を淹れてみる。

なんの変哲もないお茶。

昨日までは。

私もいつかきっと、飛びたい。

そう思った時、急須から眩いほどの星がこぼれこぼれて湯呑みに落ちた。

ふふふ。笑みがこぼれる。

「美貴、何してるの？ちゃんと片付けときなさいよ」

母が居間から顔を出した。私は悪いものが取り除かれた、晴れやかで素直な気持ちで大声を出した。

「見て見て、茶柱が3本も立った！お母さん、明日水筒作ってよ」。